
我が名はプー太

いおり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我が名はブー太

【NZコード】

N0777D

【作者名】

いおり

【あらすじ】

焼き鳥屋の女将さんに飼われている小桜インコのブー太の目を通して、人々の様子をちょっと皮肉つて描いています。一話ごと短編になっています。

ぼくの「主人様」

おなら普普通の「主人」に「主人太郎」、そんな連想をさせる聞こえの悪い名前、「主人太」というのは、小桜インコの「ぼく」である。

さて、そんな品のない名前を付けてくれたご主人様、えー、ご主人様と呼ぶほどたいそうな人間とも思えないものであるが。

まあ、「ご主人様の旦那が彼女のことを「ほれ、お前の『ご主人様』が呼んでいるぞ」などとぼくに言うものだから、便宜上とりあえずそう呼んでおくとしよう。

その「ご主人様は、ぼくの前にも「主人太」という小桜インコを飼っていた。

「ご主人様は、初代の「主人太」をこよなく愛していたらしい。

食事の時はもちろん寝る時まで、いつも一緒にいたという。

だが、かわいそうなのに初代はとても短命で、たった三年しか生きられなかつた。

その時、獣医に注意されたのが、ゲージから長い時間出したり、限られた物以外むやみに人の食べ物を与えてはいけないということだつた。

「ご主人様は、ぼくを飼つてからといつもの獣医の言い付けを忠実に守つた。」

そのためぼくは、ほとんどゲージから出してもらつことも出来ず、おいしい人間の食べ物も知らずに生きてきた。

そんな御蔭か、無事八歳を迎えることが出来た。

楽しい思いをして短い一生を終えるか、ごく平凡な日々を送つて長生きをするか、まあどっちが幸せなのかわからない。

だつて、ぼくは後者の生き方しか知らないし、まあ大した不満もあるわけで無し、ただ欲を言えばもう少しゲージから出してもらいたいだけだった。

しかし、そんな平凡な暮らしのぼくにも、命の危機があつた時もある。

ところで、なぜご主人様が小桜インコを飼おう思つたのか。

それは、以前、ペットショップで小桜インコに一目惚れをしたからだという。

「わー、見て見て、ずんぐりむつくりしていくかわいい」

ご主人様は、他の鳥を見ていた友達を手招きした。

テーブルに置かれた雑の入つたゲージを、制服姿の中学生一人は、背中を丸めて頬寄せ合つて覗き込んだ。

「ほんとだ」

「小桜インコつていうんだ、セキセイインコと違つておつぽが短い。ねえ、大人もみてみない？」

「「じぞくらいん」「「じぞくらいん」「「じぞくらいん」「」

呪文を唱えるように二人は、大人になつた鳥達の入つているゲージを見て回つた。

「これだ！ 「じぞくらいん」」

「手のひら位の大きさか、抹茶色のずんぐりした身体、まん丸な黒い玉は同じだけど、おでこから顔が赤い！」

「雛はグレーっぽい顔しているのにね。でも、この方がきれいじやん」

「雛の色の方がいいのになあ

「そつかなあ」

当時、主人様は、朱色の派手な顔がおきにめさなかつたようだつた。

そして、八年前、ぼくが初めて主人様と出会つたのも、このペットショップ。

「ご主人様が、結婚した年のことだった。

ぼくを見たご主人様は、店員にこう尋ねた。

「もう少し幼い雛は、いつ入るのですか」

「まだ若いですよ。こんなに立派な雛はめったに入りません」

その言葉に首を傾げながらも、ご主人様はぼくを買うことに決めた。

その時のぼくは、もう大人の大きさになつており、産毛もだいぶ生え替わっていた。

ようするに、店員の売らんがための嘘にご主人様はだまされたのである。

しかも、ぼくは病気持ちで、次の日から具合が悪くなつた。

ご主人様はあわてて、近くの動物病院にぼくを連れて行つてくれた。

普通の動物病院では小鳥の診察をしてくれない、だからそこのところをご主人様はきちんと電話で確認していた。

なのにだ、その病院でもらつた薬を飲まされても、ぼくはかえつて具合が悪くなる一方だった。

困つたご主人様は、別の病院にぼくを連れて行ってくれた。

そこは、ちょっと厳しい女の獣医である。

その獣医は最初の獣医と違つて、検便をしたりぼくの体にさわったりして念入りに調べてくれた。

その時、獣医から、「たぶん、男の子でしょう」と言われた。

最初の獣医はこの獣医の後輩で小鳥の診察はしていないはずらしかった。

しかもよこした薬は、今ではめったに使われない副作用の強い物だった。

副作用どころか、あのまま飲み続けていたら死んでいたかも知れないといつ。

まったく、ひどい歎医者もいたものだ。

診察料さえ取れれば、小鳥の命などなんとも思つていないのである。

もしこれが、人間だったら医療ミスで大騒ぎのところだ。

それ以来ご主人様は、その病院の前を通るたびに「歎医者め、うちのブー太を殺す氣か」と小声で言つて通るようになった。

無論、本人を前に声にする勇気など、ご主人様にはなかつたが。

とにかくにも、ぼくは新しくもらった薬のおかげで元気になつ

たのだが、その薬の苦いのなんのって半端じゃない。

薬を飲まされる度に吐き出したり、「ご主人様の手に思いつきりかみついたりして大暴れをした。

そんな日々を送るなか、ご主人様がぼくに薬を飲ませながら、一度だけ涙を流したことがあった。

その時は、ぼくが噛み付いたために痛かったのかなくらいに思っていたのだが、今になつて思うと違うのかもしれない。

ぼくのためを思つてしてくれていたのに、その思いも通じずに暴れるぼくを見てたぶん悲しかったのだろう。

今になつて少し反省。

でも、「ご主人様は獣医から『よくがんばりましたね。あなただから、パー太ちゃんは助かつたのですよ』と言われた時、少し照れながらも嬉しそうな顔をしていた。

これが、ぼくの命拾いした時のエピソードである。

あつ、それからぼくにとって、とっても大切な出来事が一つあつた。

ある日のこと、ゲージをのぞいた「ご主人様は、信じられないものを田にすることになつた。

それはなんと卵だつた。

もううん、この家の鳥といえぱぼくしかいない。

だからこれは、まぎれもなくぼくの卵であり、彼氏のいないぼくは無精卵を生んだのである。

『主人様は、何度も何度も卵を見ながら驚きの声を上げた。

「えーっ！ メスだつたの！」

店に集う偉人たち～カラオケの達人編～

「主人の旦那が脱サラをして、二年前から店を始めたのである。

鳥であるぼくと暮らしていながら、焼鳥屋を始めるとは、人間はなんて残酷な生き物なのだと思った。

だが、鳥といつても鶏なので勘弁してやることじよつ。

「主人様の家と店とは、かなり離れている。

だから、毎日お昼過ぎに「主人様は、ぼくを自転車の荷台にゲージ」と乗せると店までかよつて来る。

そして、ぼくのゲージは、いつも店の入り口近くレジの上に吊るされる。

ほろ酔い加減で店に入ってきた客は、ぼくを見るなりこんな暴言を吐く。

「この鳥焼いてくれるのかね」

「いやあーお客さん、その鳥は売り物じやあないものですから」

旦那は笑つて答える。

そりいもそりつて酔っ払いは、同じジョークしか言えないのだろうか。

といひで、この焼鳥屋へやつてくる客はやけに偉い人物が多い。

食通に発明王、海外旅行通、とにかく色々なことのスペシャリストがいる。

そんな人々の中で意外に多いのが、カラオケの達人である。

このあたりの人間は、みんな歌手になれるのではないかと思うほどだ。

カウンター席から今日も聞こえてくる。

「そりや、彼女の歌はつまいよ。この辺で一番じゃないかな」

たまたま隣り合わせた古くから知り合いの女性を、その男性は褒めた。

「そういう野川さんもお上手じゃないですか」

「えつ、ぼく？　ぼくのことはねえ、どうでもいいの。やつぱり、きれいな女性が歌っている姿は絵になるよねえ。

ねえマスター、ここ、カラオケ無いの。残念だなあー、マスターにも彼女の歌聞かせてあげたかったなあー」

「野川さん、アカペラでいかがですか？　なんていったって、この町の森進一と呼ばれていらっしゃるのですから」

「おふくろさんよー、おふくろさん、空を見上げりやー、あつ、

この歌歌うと訴えられちゃいますからね、最近は歌えないんですよ、
ハハハハハツ！」

カラオケの達人編 2

カウンター席は知らない者同士を結びつける事も多い。

まあそれは、良しきにつけ悪しきにつけだ。

「この辺りで、俺にカラオケでかなう奴はいないんだ」

肝臓の具合でも悪いのではないかと思つような浅黒い肌で、小柄な五十代中頃の客が声を張り上げた。

「すごいですね」

旦那が相槌を打つ。

「そうだ、なんたつて、有名な作曲家の学校で習つたんだから、俺は上手いんだ」

少し語尾の上がった口調で、瓶ビール一本をお通しと奴だけでじつくり飲みながら、ずっとしゃべつている。

「お客様、なに歌うんだい」

隣に腰掛けていた初老の紳士が、声をかける。

「とか、だ。普通の人には歌えないんだ。いい歌だ」

「昔の歌だね。わたしは新曲しか歌わないから」

「今の歌はダメだ。 やっぱり、昔の歌は良いね。 なあ、マスターもそう思うだろ？」

抜けた前歯の間から、細かくなつた豆腐を撒き散らし同意を求めた。

「わづですね」

「みんな昔で時間が、止まつているんだよ。 それじゃダメだ、新しい歌歌わないど。 そう言つてもやっぱりわたしは演歌だけどね」

「ああ、演歌はいいね。 でもねえ、悪いけどおたくより俺の方が、たぶんうまいから」

「わたしは、いつもカラオケで九十点以上出していますよ。 八十六点なんていうとがっかりしちゃうね」

「あの点数はダメだ。 下手な奴の方がよかつたりするんだ」

「譜面どおりに歌えなかつたらダメなんですから、本当に下手だったら点数なんて取れませんよ。 点数を取る気になつたら譜面どおりに歌う、それが出来なかつたら本当に実力があるとはいえないよ」

「そんなに言つなら、よし、これからカラオケに行こう。 よつ、ママ勘定！」

会計を済ませると、カラオケの達人達はバトルへと出かけていった。

ぼくはこの後の二人の対決を見てみたいよ、見たくないよ
な。

とにかく、すぐ気になつた。

後日、初老の紳士が店に来た時、ご主人様が尋ねた。

「この間のカラオケはどうでした？」

「ああ、あれね」

「お相手の方の歌は、いかがでした？」

「まあ、うまかったよ。だが、たいした事ないね」

その後、もう一人の客は現れることはなかつた。

グルメ編（前書き）

第2部だったのですが、4部に変更させていただきました。

グルメ編

様々な偉人達の中で、なんと言つても一番多いのは食通だ。

どうしてこんなにいるのだろうと思つほど、食べ物にこだわっている人達がいる。

「鯖は関鯖にかぎるね。ラーメンは、あの店のスープにあつちの店の麺を入れたら最高だね。

あつ、その大根おろしの汁、そこがおいしいんだよね、知つてた？
ねえ、その焼き鳥、カリカリになるまで焼いてね。大将、焼き方最高だね、こうばしくっておいしいよ」

真っ黒に焼けた肉の上に、雪のように降り積もった塩。

皿一面を真っ赤な花畠に変えた唐辛子。

皿から溢れそうになる醤油の池。

食通の味覚はものすごい。

常人のぼく……いや、ただの鳥のぼくにはは、とうていついていけない味覚である。

また、こんな食通もいる。

「あやこ」の焼鳥屋はおこしこよ

「やつですか」

「塩は何使つてこるの?」

「いやあ~、お密やん、企業秘密ですよ」

人間都合が悪くなると企業秘密だとなんとか言つて、じまかそ
うとする。

「海水で作る塩なんかも、取れる場所によつて違つよね。ピンク
岩塩なんか最高だよねえ」

「やつですね」

「焼き鳥屋によつては、自家製の辛味噌置いてあるといろがあるよな。
あれいいよね。」
「でも出せば」

「辛味噌、おいしいですよね」

「焼き鳥はやつぱつ炭に限るね、備長炭がいい。炭の香りがつく
んだよね。」
「なにで焼いてこるの?」

「すみません、ガスなんですよ」

「ガスがあ、炭に変えたらいいと思つた」

「やつですね」

「お宅も炭にすればいいのに、紹介してあげようか。知り合いに炭を卸している人がいるから」

と、色々焼き鳥のえらーい講釈をするのだが、この客、いつ来てもこここの焼き鳥は一本もたのまない。

うへん、味見もせずに味がわかるのだから偉い。

まあ、この客に限らず、焼き鳥に対する能書きを言つて密に限つて焼き鳥をあまり食べなかつたりする。

さて、今宵はいつたいどんな偉人がこの店の暖簾をくぐるのだろう。

この店に集う多くの偉人達に乾杯。

そして、毎日、偉人達の会話に相槌を打ち続ける田那さんにぼくは脱帽する。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0777d/>

我が名はプー太

2010年10月8日23時53分発行